



コーヒーも氷もあった!

幕末明治のころの 有田の暮らし



田代紋左衛門さん(中央)と妻ノブさん(左)
手塚政蔵さん(右)(手塚家提供)

来年、平成30年(2018)は明治維新から150年とうことで、佐賀県をはじめ各市町では多くの取り組みが計画されています。

ここ有田町で当時を象徴するものとして、有田異人館があります。すでにご紹介したように4月から土日、祝日を中心に開館しています。旧所有者であった田代家には数多くの古文書資料が残されていて、それらは当館へ寄贈いただきました。これらの資料から当時の人々の暮らしを垣間見ることができます。

例えば、田代紋左衛門や息子の助作などは、支店があった長崎で購入した着物やすき焼き鍋、またカステイラや金平糖などを有田へ送ったり、病床にあった助作の母ノブのためにわざわざ佐賀から医者(山口氏)を呼んで診察をしてもらったりと孝養を尽くしています。しかしながら、薬石効をなさず、ノブは明治21年6月8日に死去しました。この折も危篤状態に陥った母に届けるために、恐らく当時は高価なもので、なかなか入手も困難であった氷を、長崎大浦に住む西洋人に頼んでみたり、また、当時長崎県小浜に滞在中であった紋左衛門の娘アサの夫・林堅八に頼んだり八方手を尽くして探しています。そしてやっと函館の氷を手に入れ、長崎から時津発の昼の船便で送ろうとしますが、すでに出航後であったので和船を貸し切って150ポンド(約68kg)の氷を病床の母の元に届けました。これが6月3日。母の臨終に間に合いました。

当時は冷蔵庫もなかった時代、しかも6月という時

期にどのような手立てをして長崎から有田まで溶けないようにして送り届けたのでしょうか。その方法までは記録されていませんが、ただ日本では太古の時代より氷室というものがありましたので、明治期には氷さえ手に入ればその輸送は意外と問題なかったのかもかもしれません。

また、明治10年(1877)に長崎・千々石出身の橘常葉が記した「橘常葉遊学日記」という有田滞在記には、正月に江越礼太先生の塾生らが深川栄左衛門家に招待され、コーヒーやぜんざいをご馳走になったことが記録されています。また、同日記には長崎の土産として、氷砂糖や金平糖などを持参したことも記されています。幕末ごろより「手付猪口」、あるいは「手付茶わん」などという表現で記録されているコーヒー碗などは有田ではお手の物だったでしょうし、それを西洋人がどのように使っているかも熟知していたでしょうから、それにならってこの地でも「西洋風のおもてなし」が可能だったということでしょう。

新し物好きといえば、その筆頭にあげられるのが次ページの平林伊平さんで、「肥前陶磁史考」には率先して斬髪(鬘を切り落とした髪型)したとあります。ただ、それには続きがあって、「文化の門戸なる長崎人を除く外は、悉く在郷者と呼んでいた」という当時の有田の人々の気質も記されています。〔文中敬称略〕
(尾崎 葉子)

皿 季刊 山

No.115

秋
2017

有田町歴史民俗資料館・館報

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其三

窯焼き・初代有田町長

ひらばやし いへい
平林伊平

(天保12年・1841～明治26年・1893)



平林伊平 (窪田家提供)

いち早く斬髪をしたといわれるほど進取の気象に富んだ彼は、時代の最先端を突き進んだ生涯をおくりました。(文中敬称略)

平林伊平は天保12年(1841)6月13日生まれです。明治元年(1868)当時は27歳。父伊吉(三代鉄右衛門)は安政3年(1856)7月27日に死去しています。そのため、当時鹿吉と名乗っていた伊平は15歳で家督を継ぎました。平林家については安政6年(1859)の「有田皿山大樽山竈人別改帳」によれば、檀那寺が赤絵町の法華宗(日蓮宗)法元寺で、益千代様(諫早)被官という士分格であり、当主は釜(窯)焼職の平林鹿吉(19歳)、弟の兼助(16歳)が細工人で、妹きの(12歳)、母(42歳)、祖母(70歳)の5人家族でした。

「肥前陶磁史考」によれば、明治元年、田代紋左衛門以外に海外貿易を認められた10人のうちの一人で、翌2年(1869)、長崎に居留していた医師ボードインの注文で初めて洋食器の揃い物を製作したとあります。現在、佐賀市の徴古館には、平林製の洋食器が所蔵されていますが、同じような製品だったのではないかと思います。(写真右上)

翌年には当時の百武作十郡令が伊万里商社の販売権を取り上げ、有田の内外山から4千両の出資をし、佐賀藩から1万両を拝借して商社の基金としたとあり、その支配人に伊平が就任しています。また、明治4年(1871)には弟の兼助がドイツ人化学者で有田皿山において西洋の技術を教授していたゴットフリート・ワ



色絵草花文洋食器類 公益財団法人鍋島報効会所蔵
(高台内に「肥前有田平林製」の銘がある)

グネルの伝習生になっています。この兼助に関しては、明治6年(1873)の「喫英両国博覧会出張人名表」に佐賀の人々(大隈重信、佐野常民、納富介次郎、川原忠次郎ら)の一人として名前があがっていますが、残念ながら渡欧したのか否かは確認できません。

同年、伊平が作った電気碍子が電信寮の試験に合格し、工部省電信頭石丸安世(元佐賀藩士で前名虎五郎)より、採用の資格ありとの布達があっていますが、同13年(1880)には製造を中止したようです。

この平林家の屋敷は、現在の有田商工会議所の構内ですが、その一角に明治7年(1874)、焼き物倉庫として石蔵を建てました。現在の有田陶磁美術館です。

また同16年(1883)ごろ、伊平の発案で有田川の川筋を深く掘り下げ、伊万里湾より船舶の往来を自由にして焼き物運送などの便宜を図る計画を立て、その測量費として石場準備金の大金を当てたということで物議をかもししています。

明治22年(1889)、町村制が施行され、伊平は初代有田町長に就任していますが、翌年には辞職し、二代目の町長には多久出身の田代健が就任しています。このころは石場の所有権を巡って有田を二分するような大きな問題が起こりました。世にいう「石場騒動」です。この折には町長として、あるいは窯焼き側の代表の一人として心身を使い果たしたのでしょうか、同26年(1893)7月3日に死去しました。行年53歳。伊平には7人の子供がいましたが、現在、長女のナヲ、次男の芳次郎の子孫の方々が福岡県や静岡県などで活躍中です。これまでお互いに子孫であることを知らずにいたところ、同じ先祖を持つ子孫同士ということがわかって、現在は連絡を取り合いながら先祖のことを調べたり、平林製の焼き物を収集されています。

【参考資料】

- ・「有田皿山大樽山竈人別改帳」(有田町歴史民俗資料館蔵)
- ・「喫英両国博覧会出張人名表」(西陣織物館蔵)
- ・「田代家文書」(有田町歴史民俗資料館蔵)
- ・「有田町史 陶業編Ⅰ、Ⅱ」
- ・「季刊 皿山 No.105」
- ・「肥前陶磁史考」など

平成29年度明治維新150年プレ企画展 「知っているようで知らない明治」

来年は明治維新から150年の節目の年です。その前年である今年「明治」という時代がどのような時代であったか、有田のこの時代を生きた人物の記録や出来事を通して、意外と知らない明治のことを展示する予定です。その前に少し内容をご紹介します。

・有田を訪れた異国人

幕末明治のころの有田には、異国の人も訪れています。教師として幕府に雇われたフルベッキや鉱山技師モーリス、コバルト顔料や石炭窯の使用の指導を行ったワグネルをはじめ、地理学者でもあり写真家でもあり作家でもあったエリザ・R・シドモアは明治30年ごろ有田を訪れ、泉山や窯場を見学した記録をまとめ新聞記事として米国で発表しました。



ゴットフリート・ワグネル

・佐賀県？伊万里県？長崎県？

明治4年7月の廃藩置県後、すぐに現在のような47都道府県になったわけではありませんでした。佐賀藩においては、佐賀本藩領は佐賀県、3つの支藩はそれぞれ小城県、蓮池県、鹿島県に、そして唐津藩は唐津県になります。その2ヵ月後9月に佐賀県と厳原(旧対馬藩)を合併し伊万里県になり、11月には残り

4県も伊万里県に合併されます。しかし明治5年には再び佐賀県に、明治9年4月には一時三潁県に合併されますが、同年5月～8月に長崎県に統合され、明治16年によく長崎県から分離独立して現在の佐賀県となりました。

・万国博覧会

幕末明治期の有田は多くの万国博覧会に参加しました。慶応3年(1867)のパリ万国博覧会から、明治37年(1904)のセントルイス万国博覧会まで、参加回数は10回に及びます。香蘭社や精磁会社が金牌を受賞する反面、西洋の技術を目の当たりにして技術革新に力を注ぎます。



明治33年パリ万国博覧会の出品作品の図案

・鉄道建設のはなし

佐賀～武雄間の鉄道が開通することを受けて、鉄道建設の機運が高まり、有田まで延長されることを希望して明治27年に有田の有力者達が門司へ陳情に向かいます。一方、明治29年に伊万里鉄道株式会社が発足し、伊万里～新村間の鉄道建設を計画します。鉄道開設の様子を、当時の佐賀新聞などから辿ります。

期 間：平成29年11月18日(土)～12月20日(水)

※11月16・17日は展示替えのため臨時休館

場 所：泉山 有田町歴史民俗資料館 東館

入館料：無料

期間中のイベント：紅葉ライトアップ・夜間開館

11月24日(金)・25日(土) 18:00～20:00

町屋の模型作り教室を 開催しました！

平成29年8月21日(月)・22日(火)の2日間にわたって、17回目の町屋の模型作り教室を開催しました。今年は申し込みが非常に多く、定員を増したものの何人かはお断りすることになってしまいましたが、総勢16名の参加者を迎えて有田町役場東出張所の2階にて行いました。

最初に担当者から有田内山伝統的建造物群の説明を聞き、早速模型の制作にかかりました。昨年と同様に復原修理され、4月から公開中の有田異人館を50分の1スケールで作成し、さらに今年は土蔵も一緒に作成しました。土蔵も大きいので、異人館と並んだ様子は中々の迫力がありました。二棟も作るのに、時間が足りないかと心配しましたが、子ども達は真剣に作業に取り組み、何とか完成させることができました。

今回の参加者は下記のとおりです。

前園	妃成さん	(有田小学校5年生)
北川	遼さん	(有田小学校5年生)
松熊	ゆりなさん	(有田小学校5年生)
松熊	ゆうなさん	(有田小学校5年生)
深海	日菜多さん	(有田小学校5年生)
江口	慶くん	(有田小学校6年生)
旗島	晴くん	(有田中部小学校5年生)
樋口	優心くん	(有田中部小学校5年生)
藤	まほろさん	(有田中部小学校5年生)
岩永	あやめさん	(有田中部小学校5年生)
下村	麗愛さん	(有田中部小学校5年生)
川原	萌香さん	(有田中部小学校5年生)
今泉	青季さん	(有田中部小学校5年生)
芝原	幸之助くん	(有田中部小学校6年生)
川久保	愛莉さん	(曲川小学校5年生)
木村	晴哉くん	(埼玉県小学校5年生)





歴史の川ざらい ～ベンジャラを探そうを 開催しました!



平成29年8月5日(土)、今回で6回目となった歴史の川ざらいを開催しました。

有田町を流れる川には、捨てられたり流れ込んだりして堆積した江戸時代からの陶片(ベンジャラ)が残っています。それを採集し、その場で文化財課の村上課長がいつごろ焼かれ、もとの形がどのようなもので、何に使われていたかなど鑑定しました。川に入る前に有田皿山の成り立ちやどのようなものを採集すればいいのかという事前学習を、有田観光協会の2階を借りて行いました。

その後、岩谷川内の白川川へ移動し、他県から有田に里帰りした子供たちも交えた4人と保護者の方も参加して、さっそく川の中へ。今回もれきみん応援団の方に参加していただき、安全面の確保にも努めました。

江戸時代の芙蓉手皿などの破片のほかに、今回は大変珍しい「銹瑠璃青磁釉蓮鷺文輪花三足皿(さびるりせいじゆうはすさぎもんりんかみつあしざら)」「(1640年代・九州陶磁文化館蔵)の類似品が採集されました。採集後は有田独特の遊びでもあるハマ投げに歓声があがりました。

子供たちが採集した陶片は貴重な文化財であり、持ち帰ることはできませんが、後日、この陶片が持つ情報、例えば元の形、制作年代などをまとめて子供たちに届けました。この経験を通して何気ない陶片が貴重な文化財の一つであること、さらに町中に残る歴史を再認識してもらいたいと思っています。また、秋の企画展の際に今回の採集品を展示する予定です。

今回の参加者は以下の通りです。

- ・篠原 優太くん (有田中部小学校5年生)
- ・木村 晴哉くん (埼玉県小学校5年生)
- ・木村 颯哉くん (埼玉県小学校2年生)
- ・池田 百花さん (香川県小学校4年生)



町内の先生方、 歴史探訪・研修

8月3日(木)・4日(金)の2日間、「佐賀県2年目研修」ということで、西有田中学校の田雑・井上両先生が資料館の仕事と、有田町の歴史について研修・体験に来館されました。朝は館内外の掃除から始まり、1日目は館内の見学後、有田町内の遺跡など現地見学。2日目は有田に残る古文書の解読や、実際に遺跡から出土した遺物の整理作業に挑戦していただきました。



山田神社にて

また、8月7日(月)には、有田町内4小学校の先生6名が有田町の歴史について史跡探訪を実施したいということで、泉山磁石場から天狗谷窯跡や有田内山地区、唐船城、岳の棚田、柿右衛門窯の工房など有田町内各所を見学し研修していただきました。

今後の先生方にとりまして、この経験が有意義なものとなりますことを期待しています。



三空庵広場にて

季刊『皿山』

通巻 115号 (平成29年9月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>